

このコーナー、今年度は多文化共生のための異文化理解という観点から書いてみたいと思います。私は台湾に二年弱住んだことがあります。その時に最初に驚いたのは、割り勘をしないことでした。誘った人がごちそうします。ランチでもです。さらに不思議なことに誰も「ごちそうさま」という類の言葉を言いません。最初の頃、私は奢った人に失礼だと思いましたが、台湾在住中の半ば私もお礼を言わない人になっていました。

ある日、「割り勘にするとどんな感じなの？」と台湾の友人に聞きました。彼の答えは「冷たい感じがする」というものでした。お金も精算して人間関係もそれで終わりのような感じだと言うのです。確かにごちそうになるということは、「奢られた」ことをいつか返そうと思わせ、機会を見つけて奢ろうとさせます。そして奢られた者が奢ると、さらにそこで奢られた者が次に奢る。奢ることで会う機会が次々に確保され、人間関係が続く。割り勘はそんな機会を失わせ、冷たいと感じさせるわけです。

若い世代を徐々に割り勘が増えていますが、誘った方が奢る習慣は実は中国、韓国でもあります。割り勘を旨とする日本から見ると不思議な習慣ですが、その場で借りを返すのではなく、長い時間をかけて貸し借りをし、つきあう仕組みが奢る習慣なのです。このように一見不思議な習慣にも理由があります。自分たちの常識だけで相手の文化を見ないことから異文化理解が始まり、異文化を尊重する多文化共生が生まれるのです。ところで奢るに見られる同じ仕組みは日本にもあります。そのことは次回、お話します。

文：県立広島大学 上水流久彦 講師

2012(平成24)年 広報あきたかた 5月号掲載